活動報告

カンボジアパラ陸上競技指導と福祉教育施設視察について
Para Athletics Coaching and Visits to Welfare Education Facilities in Cambodia

三井　利仁[1)]　米山　遥香[2)]　鳴海　りお[3)]　島田　花[4)]　西山　直樹[2)]
Toshihito MITSUI, Haruka YONEYAMA, Rio NARUMI, Hana SHIMADA, Naoki NISHIYAMA

1）日本福祉大学スポーツ科学部
Faculty of Sport Sciences, Nihon Fukushi University
2）特定非営利活動法人 ハート・オブ・ゴールド
Heart of Gold, a non-profit organization
3）日本福祉大学スポーツ科学部　2020 年度 3 年生
Faculty of Sport Sciences, Nihon Fukushi University
4）日本福祉大学スポーツ科学部　2020 年度 4 年生
Faculty of Sport Sciences, Nihon Fukushi University

1. はじめに

今回のカンボジアでのプログラムは，2017 年 2 月に「Sport for Tomorrow」の事業（写真 1）として，特定非営利活動法人 ハート・オブ・ゴールド（以下，ハート・オブ・ゴールド）【1996 年 12 月に開催されたアンコールワット国際ハーフマラソンに関わった人々により，「スポーツを通じて国境，人種，ハンディキャップを超えて希望と勇気の共有を実現」することを目指し，1998 年 10 月 10 日に NGO として発足．2001 年 3 月には岡山県より NPO 法人認定を，2012 年には岡山市から認定 NPO 法人となり現在に至る．】[1)] が筑波大学，日本大学，日本福祉大学の協力の下，実施したカンボジアパラリンピック委員会へのパラ陸上競技強化支援の関係で，今回，特別支援教育，国際支援とスポーツを学ぶ本学学生に対して，現場での視察機会を求めてカンボジアで活動するハート・オブ・ゴールドに依頼し実施された．前回同様，カンボジア車椅子選手への技術指導とフォーム分析を 2021 年 3 月に開催予定である ASEAN パラゲームズに向けて行った．

写真 1　Sport for Tomorrow 事業

2. 今回の活動の概要

2020 年 2 月 8 日から 15 日（7 泊 8 日）にカンボジア／プノンペンで行った．実際に行った内容については下記の表 1 のとおりである．

表 1　カンボジア研修日程

	2月8日（土）	2月9日（日）	2月10日（月）	2月11日（火）	2月12日（水）	2月13日（木）	2月14日（金）
6:45			ホテル発	ホテル発	ホテル発	ホテル発	ホテル発
7:00~ 10:00			パラ陸上クリニック at Olympic Stadium①	パラ陸上クリニック　at Olympic Stadium③	オリンピックスタジアムにてトレーニング補佐 9:00 National Paralympic Committee of Cambodia訪問 ・Sitting Valleyball ・Wheelchair Table Tennis ・Boccia	オリンピックスタジアムにてトレーニング補佐	オリンピックスタジアムにてトレーニング補佐
10:00						ハート・オブ・ゴールド事務所にてボランティア作業	ハート・オブ・ゴールド事務所にてボランティア作業
12:00		ランチ 米山、安部合流	ランチ	ランチ	ランチ	ランチ	ランチ
					14:30 PPCIL訪問	14:00 Krousar Thmey訪問	14:00 Lavalla School訪問
16:00~1 9:00			パラ陸上クリニック at Olympic Stadium②	パラ陸上クリニック　at Olympic Stadium④	オリンピックスタジアムにてトレーニング補佐	オリンピックスタジアムにてトレーニング補佐	オリンピックスタジアムにてトレーニング補佐
19:30							空港へ
21:40	FD604プノンペン着						
22:30							FD605 プノンペン発
	ホテル　The Frangipani Living Arts Hotel & Spa　#15, Street 123, Toul Tompoung I, Phnom Penh						

3. カンボジアパラスポーツの現状

カンボジアはシドニー 2000 パラリンピック大会（以下シドニー大会）初参加を皮切りに，リオ 2016 パラリンピック大会まで毎回，ユニバーサリティーワイルドカード枠[2] で出場している．シドニー大会ではシッティングバレーボール[3] での出場だったが，以降，パラ陸上での参加が続いている．パラリンピックでのメダル獲得はまだない．現在は 10 の競技団体（パラ陸上，パラ水泳，車いす卓球，車いすバスケ，シッティングバレーボール，ボッチャ，ゴールボール，パワーリフティング，アーチェリー，CP サッカー）が国際スポーツ連盟より認定されている．2023 年にはカンボジアで初めての SEA ゲーム（South East Asian Games），ASEAN パラゲームズの開催が決まっている．しかしながら専門的知識を持つ指導者や選手，予算不足が課題である．

4. カンボジアパラ陸上競技選手への指導

カンボジアパラ陸上競技選手でレーサー（陸上競技用車椅子）に乗り競技をしている 5 名の選手に技術的指導を行った．この中には 3 年前に指導した 4 名の選手と初めて指導する 26 歳の新人選手がいた．彼らはポリオであり日本では見ることが少なくなった障害である．今回は特に 26 歳の新人選手に対してフォーム及び練習方法の指導の依頼があり集中的な指導を行った．指導のポイントとしては，

写真 2　OSMO 装着方法

車椅子駆動の方法と体の使い方，レーサーに乗る際のポジションについて 3 日間で指導した．

方法としては，DJI 社の OSMO POCKET を選手の車椅子に固定して自分の走る姿を撮影することで自分のランニングフォームを記録することができる（写真 2）．この OSMO POCKT は 3 軸ジンバルで自動追尾システムが働くことが可能で動く被写体に自動追尾していくので動きのある撮影には，有効である．筆者の先行研究[4] において明らかにした，陸上競技用車椅子の駆動方法について説明を行った．その後，車椅子に座る位置（ポジション）についても，先行研究[5] をもとに指導した．これらの指導から表 2 の通り，タイムを短縮することができた．

表２　3 日間のタイム変化

	タイム（400T.T）
1 日目	59 秒
2 日目	56 秒
3 日目	54 秒

5. 教育・福祉施設について

1）National Paralympic Committee of Cambodia

National Paralympic Committee of Cambodia のオフィスはカンボジア郊外に位置する場所に建てられている（写真 3）．事務局長は Yi Veasna 氏が任命されている．自身が電動車椅子を利用する障害のある方で数名のスタッフが働いていた．今回は，ボッチャ（写真 4），シッティングバレーボール（写真 5），アーチェリー，車いす卓球等の練習を視察することができた．ボッチャでは，練習中にも関わらず，ミニゲームを企画し，選手と交流することができた．また，選手の中には，遠方の選手もいるため，寝泊まりができる程度の簡易宿泊施設も完備されており，すぐに練習ができる環境が整備されていた．日本に比べて施設全体が小さく，十分に整備されていない箇所があったが，その中で手作りの道具を作る工夫をしていた．

写真３　National Paralympic Committee of Cambodia

2）The Phnom Penh Center for Independent Living (PPCIL)

PPCIL は，障害者自立支援施設である（写真 6）．

写真４　選手の方々とミニゲーム

写真５　シッティングバレーボールの様子

写真６　PPCIL のスタッフとボランティアスタッフの方々

日本の介護サービスのシステムがベースとなっており，介護サービスの向上やバリアフリーの設置を求め，政府へ交渉等を行っている．主な活動内容としては，障害者の自立指導や生活支援，障害者同士の

意見交換のコミュニティーづくりを行っている．また，障害の理解を広めるために，チラシのポスティングや，近隣の大学に通う学生を対象に，ボランティアスタッフを募集している．職員の給料が安定していないことや，介護という職種の認知の低さもあり，職員の希望者が少ないことが現状であった．PPCIL を利用している方の１日の生活を学び，生活している様子を視察することができた（写真 7）．その方は全介助を要するため，１日に２人の職員やボランティアスタッフが生活の手助けを行っている．PPCIL を利用する前は，親が介護をしてくれていたため１週間のうち 1,2 回しか外出することができなかった．しかし，PPCIL を利用することで，毎日外出することができ，とても充実しているとお話を伺うことができた．また，この方は PPCIL の介護サービスを利用していると同時に PPCIL の職員として働いている．

写真７　一人暮らしの部屋の様子

3）Krousar Thmey

Krouser Thmey とは，幼稚園年齢の子どもから高校３年生年齢の視覚障害児，聴覚障害児が通う特別支援学校である．将来，社会で生活していくことができるように，普通学校に通い健常の生徒と共に学ぶシステムである．視覚障害の生徒は，小学３年生から，聴覚障害の生徒は，小学５年生から半日だけ普通学校に通うことができる．普通教科以外にも英語やパソコン，音楽等の授業に力を入れている．視覚障害クラスの音楽は伝統楽器，聴覚障害クラスでは踊りが行われている（写真 8）．他にも，生活をしていく中で必要な，スティックの使い方の授業や手話の授業など特別な授業を設けており，視覚障害の生徒の入学時には，授業を行う前に校内の案内が行われる．そのため，今回訪問では，視覚障害の生徒が校内を自由に歩きまわる姿が見られた（写真 9）．また，定期的に医師が学校に訪れ，診断が行われる．そこで補聴器やスティック等の道具が必要と診断されれば，奨学金で生徒に支給される．学校側としては，将来，知的障害者が通えるクラスを作りたいため，今よりも更に教師の育成に力を入れていきたいとお話を伺うことができた．

写真８　視覚障害クラスの音楽の様子

写真９　校内の様子

4）Lavalla School

Lavalla School とは，肢体不自由の生徒が通う特別支援学校であり，1 クラスだけ知的障害が重複しているクラスがある．生徒は補装具を付けている生徒や車いすを利用している生徒がおり，比較的軽度の肢体不自由者である．この学校は，オーストラリアが支援を行っているため食事や制服も含めて 1 年間 25 ドルである．日本も学校内の設備の一部を支援している（写真 10）．自立支援教室校内には PT が常駐し，医師は週 2 回学校に来て生徒の体調確認をおこなっている（写真 11）．訪問した時も，女子生徒が気軽に入室して，診断を受けていた．生徒は，男女別の寮で生活をして，卒業後も学校内にある家から大学に通うことが可能である．

写真 10　Lavalla School にある記念碑

写真 11　自立支援教室の様子

3. まとめ

今回，スポーツ科学部のゼミ活動が，初めて国際ボランティアとしてカンボジアに訪れることができ，ハート・オブ・ゴールドの皆さんに心より感謝申し上げます．さらにスポーツ科学部をはじめ関係者に感謝申し上げます．このように日本福祉大学スポーツ科学部の支える側に立った現場を実際に体験することが非常に大切であり，体験したものにしか感じることができない経験になったと思う．今後もカンボジアを始め，多くの国々と連携をとり，学びのキャパシティーを広げられるよう検討していく．

参考文献

1）特定非営利活動法人 ハート・オブ・ゴールド
https://www.hofg.org
2）カンボジアパラリンピック委員会
https://www.paralympic.org/cambodia
3）一社）日本パラバレーボール協会
http://www.jsva.info/contents/spoting_events/sitting.html
4）三井ら , 日本障がい者スポーツ学会誌 , 上部胸髄損傷者における陸上競技用車いすの駆動動作について ,2015,(24),64-65
5）明石啓太 , 山辺 芳 , 白崎啓太 , 宮崎祐介 , 三井 利仁 , 体育学研究 ,2019, 64(1),67-77